

PDFサンプル

動く映画館

ある夕がた、区のやしき町を、ふたりの少年が歩いていました。もとボクサーのおとうさんをもつ君と、すこしおくびょうだけれども、あいきょうものの君です。ふたりとも、少年を団長とする少年探偵団の団員なのです。ふたりは小学校の六年生ですが、井上君はクラスでも、いちばんからだが大きく力も強いうえに、ときどき、おとうさんにボクシングをならっているのです。だれにも負けません。野呂君は井上君にくらべると、ぐっとからだ小さく、なかなかチャメスケです。ノロちゃんというあだなでおっています。そういうふうには、からだのかっこうも、性質もちがっていますけれども、ふたりは大のなかよしでした。

「おやっ、あれ、なんだろう。へんな紙しばいだねえ。」 ノロちゃんが、町のむこうの方に、おおぜいの子どもが集まっているのを、ゆびさしていいました。「うん、へんだね。紙しばいじゃないよ。自転車じゃなくて、自動車がとまっているもの。いってみよう。」 ふたりが、その方へ近づいていきますと、だんだんようすがわかってきました。それはオート三輪を、小型自動車のように作りかえたもので、その自動車のうしろの上のところに、板で四角にかこったものが出っぱっていて、そのおくに、二十インチのテレビぐらいの大きさの白いスクリーンに、何かモヤモヤと動いているのです。「あっ、わかった。映画だよ。自動車の中から映画をうつしているんだよ。」「そうだ。西部劇だ。カウボーイが、馬にのって走っているよ。」 ふたりは、いそいで、見物の子どもたちの中へは行っていきました。

「いまや、トニーは、ぜったいぜつめい。ピストルをうちつくし、もうたまが一発もなくなくなったのであります。」 赤と白のだんだらぞめのとんがりぼうしに、おなじ服をきて、顔をまっ白にぬり、ほおに赤いまるをかいた男が、しわがれ声で映画の説明をしています。この道化師が、オート三輪の小型自動車を運転して、紙しばいのように、町から町をまわっているのでしょう。それじゃ、子どもたちにお菓子を売っているはずだとおもって、あたりをながめると、子どもたちは手に手に、ロケットの形をした長さ二十センチぐらいのチョコレート色のお菓子を、もっています。なかには、それをしゃぶっている子もいるのです。「それ、なんてお菓子？」と聞いてみますと、「オネスト＝ジョンだよ。」と答えました。中は、あまいせんべいのようなもので、その外がわに、チョコレートがぬってあるのです。

小型自動車の横がわを見ますと、上のほうに、映画のステールが、がくぶちに入れて、いっぱいならべてあります。その下に、大きな字で「移動映画館」と書いてあるのです。

「そのお菓子、いくら？」 また、聞いてみました。「一個、十円だよ。」と答えます。十円でこんなに映画が見られるなら、やすいものだと思います。「移動映画館で、うまいことを考えたねえ。ぼく、こんなの、はじめて見たよ。」「うん、ぼくも。それに、あの道化師のおじさん、説明がうまいじゃないか。」カウボーイの映画がおわると、道化師は、チョンチョンとをたたいて、「きょうは、これでおしまい。また、あした、今ごろくるからね。おこづかいをもらっておくんだよ。じゃあ、ハイチャ！」

道化師は、みょうな身ぶりで、ひとつおじぎをすると、そのまま、運転席にはいり、小型自動車は、ノロノロと出



発しました。井上、野呂の二少年は、なぜか、そのまま帰る気になれないので、ノロノロ自動車のうしろから、小ばしりについていきました。じゅうぶん、ついていけるほどの、のろさなのです。とちゅうで、道化師の顔が、運転席の窓からヒョイととびだして、うしろをながめました。そして、二少年がついてくるのを見ると、ニヤリと笑いました。おかしいような恐ろしいような、なんともいえぬ、きみょうな笑いかたでした。ふたりの少年は、「なんだか、へんだなあ。この道化師は、あやしいやつかもしれないぞ。」と思いました。